

学会彙報

理事會

〈第一回〉

〈第二回〉

〈第三回〉

〈第四回〉

前輯掲載済み

昭和五十一年一月十三日

於龍谷大学図書館会議室

- 一、真宗研究第二十輯発刊について
- 一、第二十三回大会の件

〈第五回〉

昭和五十一年三月九日

於龍谷大学図書館会議室

- 一、第二十三回大会の件
- 一、経理状況の報告

昭和五十一年度

〈第一回〉

昭和五十一年五月十一日

於龍谷大学図書館会議室

- 一、第二十三回大会並びに総会に関する件

一、昭和五十年年度決算報告

一、昭和五十一年予算案審議

一、学会費値上げの件

一、役員改選の件

一、第七回木辺門主奨学賞選考 大谷大学江上淨信氏に内定

一、第二十四回大会会場に関する件

〈第二回〉

昭和五十一年五月二十九日

於龍谷大学図書館会議室

- 一、第二十四回大会に関する件

〈第三回〉

昭和五十一年七月一日

於大谷大学図書館会議室

- 一、第二十三回大会決算報告
- 一、事務引継ぎの件

第二十三回大会

第二十三回真宗連合学会大会は、昭和五十一年五

月二十九日、三十日の両日に亘って、龍谷大学大宮

図書館を主会場として開催された。各地より多数の参加者があり、各派御門主、宗務総長を迎え活気あふれる学会であった。

〔第一日〕五月二十九日(土)

龍谷大学大宮図書館に学会本部を置き、午前八時に受付をはじめた。

〔研究発表〕

午前九時三十分より十六時三十分まで左記の十四氏の研究発表が行なわれ、活潑な質疑応答がなされた。

- 1、女子学生の宗教意識について
京都女子大学 寺川 幽 芳
- 2、『教行信証』における『菩薩戒経』の引意について
本願寺派 山崎 龍 明
- 3、念仏と法難についての一考察
出雲路派 小泉 宗 之
- 4、大行論の一考察
龍谷大学 武田 龍 精
- 5、浄土教と神話
大谷大学 安富 信 哉
- 6、「自 然」
——時間の問題を中心に——
高田学会 鷲尾 弘 範
- 7、唐代浄土教の一面
龍谷大学 上山 大 峻
- 8、近世における東本願寺の宗務機構について
大谷大学 谷端 昭 夫
- 9、源信和尚の仏土観
本願寺派 細川 行 樹

10、近世真宗と百姓一揆
龍谷大学 早 島 有 毅

——飛騨地方における明和年間以降の百姓一揆と本願寺教団の動向——

11、真蹟本に見る親鸞聖人のかなの用法
仏光寺派 門 川 徹 真

12、方便法身としての法藏菩薩と名号
高田学会 本 川 光 定

13、教化学とは何か
同朋大学 池 田 勇 諦

14、『末法灯明記』の思想的意義
大谷大学 坂 東 性 純

〔会員総会〕

研究発表後、龍谷大学大宮図書館講堂において会員総会を開催した。各派御門主、法嗣殿の御臨席を賜ったほか、各派宗務総長が出席された。総会の内容は次の通りである。

第一部

- 一、開会の辞
柏 原 理 事
- 一、勤行(嘆仏偈)
石 田 理 事 長
- 一、挨拶
石 田 理 事 長
- 一、挨拶
本願寺派宗務総長
- 一、祝 辞
本願寺派門主
- 一、祝 辞
高田派門主
- 一、祝 辞
三門徒派宗務総長

第二部

一、座長推挙

司会者柏原理事の発言により本願寺派佐々木徹真氏が推挙された。

一、昭和五十年年度会務・会計報告

山本理事
会務報告中、第七回木辺門主奨学賞は、昨年度大会の研究発表者の中から規程に従って選考した結果、大谷派江上淨信氏に授与される旨発表があった。

一、昭和五十一年度予算案審議

山本理事

一、学会費値上の件

山本理事より現行の会費千円では、印刷費、郵送料などの値上げにともない来年度より大幅な赤字が見込まれることが説明され、五十二年度より会費千五百円案が提示され、満場一致でこの原案を承認可決した。

一、役員改選の件

本年度は役員改選の時期にあたり、全員が改選された。まず五名の選考委員によって評議員が選ばれ、ついで評議員の中から理事が選出され、更に理事の中から藤原幸章氏が理事長として互選せられた。石田充之、藤原幸章新旧理事長の挨拶があった後、石田旧理事長を本学会参与とすることを満場一致で決めた。

一、次年度大会会場の件

石田理事長より次年度大会会場は、各派本山の都合や順番より考えて、高田派に依頼した旨の提案があり、これに応えて

高田派を代表して服部総務より承諾した旨の発表があった。

一、その他

会員より学会組織や運営について問題提起がなされ、今後検討されることになった。

一、閉会の辞

柏原理事

〔両堂参拝〕

会員総会終了後、西本願寺両堂に参拝し、ひきつづき御影堂前にて、参会者一同記念撮影を行った。

〔懇親会〕

午後六時より西本願寺境内丸金食堂において、会員六十余名が出席し、山本理事の司会で開催された。各派御門主、法嗣殿、総長殿など多数の方々の御出席をいただき、和やかな歓談の後、午後七時三十分頃散会した。

〔宝物展観〕

第二十三回大会の宝物展観は、西本願寺と龍谷大学所蔵の法宝物が出陳され、午前十時より午後四時まで龍谷大学図書館展観室において行なわれた。出陳は次の通りである。

「証如・顯如・准如上人時代の関係史料展」

1 証如上人御影

本願寺蔵

本願寺第十世門主。実如上人の後を承けて十歳で継職された。上人は専ら和平を旨とした教団政策をとられたが、折から戦国争乱の熾烈期であり、その禍中から逃れるわけには行かな

かった。天文元年（一五三二）八月細川・六角氏及び日蓮宗徒の攻撃を受け山科本願寺を退転、寺基を大坂石山に移されるなど難局に対処された。天文二十三年（一五五四）示寂、享年三十九、信受院と号す。

2 顕如上人御影

本願寺蔵

本願寺第十一世門主。証如上人の長男、諱を光佐という。上人は戦国多端の時代に処して、よく宗門を維持発展せしめられた。門跡の勅許、織田信長との交戦、本願寺の諸地移転及び京都移基等、事蹟は多い。文禄元年（一五九二）十一月五十歳で示寂、信楽院と号す。

3 准如上人御影

本願寺蔵

本願寺第十二世門主。徳川政権の樹立によって社会のあらゆる面に政治統制が強化されたが、この重大な時期に当たって近世本願寺の基盤を築かれた。とくに東西本願寺の別立、元和三年（一六一七）十二月の大火とその復興などの難局に対処された。寛永七年（一六三〇）十一月示寂、享年五十四、信光院と号す。

4 顕如上人・如春尼連座御影

本願寺蔵

本願寺第十一世顕如上人と同内室如春尼を一幅に描いた連座像。如春尼は細川晴元の養女で、弘治三年（一五五七）四月上人のもとへ入奥された。上人遷化の後、剃髪して如春尼と称

し、幼少の准如上人を補佐し、京都本願寺草創期の経営に顕著なものがあり、教団における地位はすこぶる高かった。

5 証如上人書札案

龍谷大学蔵

6 顕如上人御消息

本願寺蔵

7 顕如上人消息案文

龍谷大学蔵

8 教如上人御消息

本願寺蔵

本願寺第十一世顕如上人の長子。文禄元年（一五九二）十一月、顕如上人の入寂により第十二世を継いだ。翌二年九月退職し、これを弟准如上人に譲った。しかし、教如上人を支持する門徒も多数あり、慶長七年（一六〇二）家康の認可を得て寺基を別立、いわゆる東本願寺を創立した。慶長十九年（一六一四）五十七歳にて示寂、信浄院と号す。

9 教如上人御誕生其他之記（永禄元年）

龍谷大学蔵

10 教如上人御得度記（永禄十三年）

龍谷大学蔵

11 准如上人御消息

本願寺蔵

12 証如上人開板御文章

龍谷大学蔵

蓮如上人がその生涯に述作した多数の御文章の中から、八通通を選んで所謂五帖一部となしたのは、実如上人の時代のことである。そうして、証如上人の時代に初めて開版された。これには仮名遣等に訂正を加えたところがある。

13 重文 天文日記

本願寺蔵

本願寺第十世証如上人の日記。天文五年（一五三六）二十一歳より天文二十三年（一五五四）遷化直前まで十九年間に及ぶものであり、石山時代の本願寺の動静を知るためには最も貴重な資料である。天文座右日記・本願寺日記・証如上人日記とも称されている。

14 私心記

本願寺蔵

蓮如上人の末子実従の日記。実従は証如上人の叔父に当たり、幼少の上人を補佐して本願寺の要務にたずさわった。日記は天文元年（一五三二）八月から永禄四年（一五六一）十二月まで三十年間にわたって記録されている。証如上人の『天文日記』とともに当時の本願寺内外の情勢を知るうえに有力な資料である。

15 阿弥陀堂之御礎之記（永禄八年）

龍谷大学蔵

16 石山本願寺御堂制札

龍谷大学蔵

天文六年（一五三七・証如上人時代）正月、石山本願寺にお

いて御堂勤番衆に対して定められた掟で、全文九カ条が掲げられ勤番僧の規範となった。

17 反古裏書

龍谷大学蔵

蓮如上人の孫に当たる加賀国光教寺願誓が永禄十一年（一五六八）六月に編集した著書で、内容は法然上人より本願寺第一代願如上人に至る歴世の沿革、諸寺の由緒などを記したものである。願誓はこの他に『今古独語』二巻などを著しており、博識であった。

18 下問家系図

龍谷大学蔵

下問家は宗祖に近侍した蓮位房に始まり、代々本願寺の秘書的な役割を果たしていた。そうして第五世綽如上人の頃から御堂の鑑取役に就き、願如上人のとき本願寺が門跡に列せられたため坊官となり、明治初年まで本願寺家臣として勢力をふるった。

この系図は蓮如上人の第二十三子願得寺実悟が天文二十年（一五五一）に編集したものである。

19 国宝 三十六人家集（複製）

龍谷大学蔵

三十六歌仙の代表作を選び三十六人家集として書写した最古（平安時代）のものである。書風や裝飾意匠の優雅さで広く世に知られている。天文十八年（一五四九）正月、後奈良天皇が証如上人に下賜したものである。

20 榮花物語（後奈良天皇下賜） 本願寺蔵

天文八年（一五三九）後奈良天皇から証如上人の母慶寿院に下賜されたもので、全部で十五帖ある。筆者は近衛政家・中御門宜秀・同宜・同宜胤・姉小路基綱・鷹司兼輔などの公家である。なお慶寿院は古典に親しんでいたことが『天文日記』にみえる。

21 重美 後奈良天皇宸翰「氷始解」 本願寺蔵

後奈良天皇の御代は、本願寺では第十世証如・第十一世顕如上人のときに当り、本願寺は青蓮院を介して朝廷に接近した。天皇からは伏見院宸筆歌一卷・鷹巢法帖・三十六人家集なども下賜されており、また天文十八年（一五四九）には権僧正の勅許を得た。

22 七夕当座短冊 本願寺蔵

本願寺には天正十三年（一五八五）頃から慶長十一年（一六〇六）までの短冊が百七十九枚襲蔵されている。これらは顕如上人を初め一門の近親や家臣が、折に触れて催した当座の歌会の短冊である。この短冊は顕如上人・如春尼・阿茶（准如上人）の詠草で、天正十六年（一五八八）が七夕の当座の歌会に詠まれたものである。

23 盆石残雪 本願寺蔵

末松山と共に著名な本願寺名物の盆石で、春山に残雪をとど

める風情がある。『貝塚御座所日記』天正十三年（一五八五）十二月二十七日の条に「秀吉公早々ヨリ御出ニテ、終日御遊興、御連歌等アリ。残雪ノ石ヲ御目ニカケラルル也」とあり、当時より珍重していたことが知られる。

24 織田信長誓詞 本願寺蔵

本願寺は元亀元年（一五七〇）以来、信長と交戦すること十一年間に及んだが、正親町天皇は天正七年（一五七九）冬以来、両者の和議をあっせんされた。これを機会に信長は翌八年三月に和議の条件七カ条を記し起請血判して朝廷にたてまつった。四月、顕如上人は紀伊に移られたが、長男教如上人はなお石山に残留された。七月、再び信長は誓詞をしたためたので教如上人も退城を決意され石山戦争は終止符をうった。この誓詞はその時のものである。

25 豊臣秀吉朱印状 本願寺蔵

本願寺は大坂退去のち鷲森・貝塚・天満へと寺地を移したが、天正十九年（一五九一）正月、秀吉より京都六条堀川の土地を寄進されここに移った。これはその時の寄進状で、南北二百八十間、東西三百六十間（そのうち本願寺屋敷を除く）の地を寄進している。

26 豊臣秀吉証状 本願寺蔵

秀吉は、顕如上人逝去後の本願寺の継職問題にしばしば助言

を与えていたが、准如上人の継職を認めた関白秀次の証状に引きつづいて、秀吉自身も文禄二年（一五九三）十月十六日この証状を下附して容認した。

27 豊臣秀次証状

本願寺蔵

石山退城後、本願寺教団には内部分裂の徴しがあった。このため願如上人の後を承けて門主の座についた長男教如上人はおよそ一年余りで退職し、代わって三男准如上人が継職した。その当時、秀吉の甥秀次は関白になっており、文禄二年（一五九三）十月十三日、この証状を下して准如上人の継職を認めた。

28 武田信玄書状

本願寺蔵

石山戦争は途中で二回の講和が成立したが、第一回は元龜三年（一五七二）八月で、信長が將軍足利義昭を仲介として本願寺の同盟者武田信玄に和議を図らせた。これはそのとき信玄から本願寺へ送られた書状であるが、その文面はきわめて平面的であり、当時の信玄の立場を想像させるものがある。

〈第二日〉五月三十日（日）

〔聖跡巡拝〕

第二十三回大会の一環である聖跡巡拝は近江の寺院めぐりを行なった。当日は雨が降り見学にはあいにくの日ではあったが、参加者約四十名は出発地点である龍谷大学正面に九時三十分集合し、観光バスにて出発した。

なお御多忙の中、大谷大学の細川行信先生が諸寺院の解説を下された。以下はその巡拝記である。

本福寺

京都を後にして、東山隨道、山科、逢坂山を貫け、一時間二十分余りで我々は最初の見学先、本福寺へ着いた。

本福寺は夕陽山と号し、正和年間、善道法師の開基である。法師は鴨義綱の後裔であり、初め野洲郡三上神社の神職であったが、後、職を捨て当地に來住し、覚如上人に帰依して弟子となり本寺を造した。第三世法住は深く蓮如上人に帰依し、寛正年中、上人より親鸞、蓮如連座の画像、並びに親鸞伝絵を授与された。又當時は本福寺道場又は堅田道場と称せられ、蓮如上人が叡山徒の横難をこうむりし時、之を当寺に避け錫を留めて時人を教化せられたことがあった。又当寺には蓮如上人当時の本願寺の情景を記す本福寺由来記がある。

福林寺

琵琶湖大橋を渡り、湖畔にたたずむ八千代で昼食をとり、一時間余り休憩を取った後、次の目的地、福林寺へ着いた。当寺は大慈山と号し天台宗である。

当寺では重要文化財に指定されている平安時代初期の作と伝えられる木像、十一面観音像を拝観した。この観音像については様々の説明があったが、中でも注目せられるのは、当寺のあるあたりは昔から大洪水のよくある場所であり、洪水のたびに信徒の方々がこの菩薩像を持って避難されたということであった。今日この菩薩像を見る時、その損傷が余りに少ないことか

らして、昔の信徒の方々が菩薩像をいかに大切に扱われたか、又仏教に対する帰依がいかに深かったか思い知らされるものがある。更に重要美術品で鎌倉時代の作と伝えられる石像宝塔を拝観した。

本願寺派赤野井別院

福林寺からバスで十分余りの所に当別院はあった。この頃になると、ようやく朝からの残り雨も止み、青空がのぞき初められた。

赤野井別院は今から凡そ六百年前、存覚上人がここに草庵を結んで念仏を弘通されたのがその濫觴となっているのであるが、その後、蓮如上人が比叡山宗徒の襲撃を避けて栗太、野洲両郡の地を移住された時、この地に移住されて坊舎を建て、実子蓮停に任持させたのが今日の別院の起りである。

現存の別院は今から凡そ二百年前(延享元年)法中、門徒により再建されたものである。当寺には、親鸞聖人四幅御絵伝、大谷本願寺親鸞聖人の縁起、親鸞聖人画像、大谷本願寺開山上人御影等の宝物がある。

聞光寺

我々の最後の参拝地、聞光寺は仏寿山と号す。長祿三年には蓮如上人が逗留されたことがあり、今日の本堂の前の庭は蓮如上人が作られたものである。聞光寺には様々なものが伝えられており、蓮如上人の六字十字名号、一休禪師の書、又

「ききしより あらみごとなる もみじかな ながめにあ

らぬ あきのよれ」

「あまごぜも 女性善門もろともに この場よりは信をとらせよ。」 (文字はその通りではない) 等の蓮如上人の御歌、更には経筒等がある。

我々は予定の本福寺、福林寺、赤野井別院、そして最後の聞光寺の見学をとどこおりなく終えた。帰路は栗東の名神インターチェンジより京都南インターチェンジまで高速道路を通り、四時頃京都市内へついた。そして遠路より参加された会員の方々を京都駅へ送り、最後に出発地であった龍谷大学正門前で解散し、それぞれ家路についた。

お知らせ

真宗連合学会、第二十四回大会は、昭和五十二年五月二十八日(土)、二十九日(日)の両日にわたり専修寺(三重県津市)において開れる予定であります。この大会において研究発表を希望される方は、左記の要領でお申込下さい。

記

- 一、研究テーマ
- 一、氏名
- 一、所属宗派および所属機関
- 一、申込先 京都市北区小山上総町 大谷大学、真宗学研究室内、真宗連合学会
- 一、申込期日 五十二年一月三十一日

(昭和五十一年五月二十九日・三十日)

会計報告

○昭和五十年(自昭和五十年三月三十一日至昭和五十一年三月三十一日)

収入合計 一、五二二、五七八円
 支出合計 一、〇八七、九七一円
 差引残高(昭和五十一年繰越金) 四三四、六〇七円

収入の部

学会費 三四九、六〇〇円
 真宗教団連合助成金 五〇〇、〇〇〇円
 雑収入 四九、〇六一円
 前年度繰越金 六二三、九一七円
 合計 一、五二二、五七八円

支出の部

第二十二回大会費 三〇七、四二二円
 真宗研究第二十輯刊行費 五七二、六九五円
 会議費 一五、〇四〇円
 事務費 八三、三六五円
 通信費 一八、〇五〇円
 交通費 九一、四〇〇円
 合計 一、〇八七、九七一円

収入の部

本願寺派大会助成金 三〇〇、〇〇〇円
 龍谷大学大会助成金 一五〇、〇〇〇円
 懇親会費 七八、〇〇〇円
 聖跡巡拝費 六八、五〇〇円
 宿泊費 七、二〇〇円
 写真代 五、六〇〇円
 その他(広告料) 一五、〇〇〇円
 学会充当金 一〇七、一六五円
 合計 七三一、四六五円

支出の部

印刷費 七〇、一五〇円
 通信費 五三、一六〇円
 懇親会費 一五三、〇〇〇円
 聖跡巡拝費 一三三、九六〇円
 宿泊費 七、二〇〇円
 写真費 一七、六〇〇円
 接待費 九五、四五〇円
 会場設営費 九四、七〇〇円
 事務費 四八、八五五円
 交通費 一九、五四〇円
 宝物展観費 三七、八五〇円
 合計 七三一、四六五円

○第二十三回大会会計報告

合計

七三一、四六五円

役員名簿

顧問
参与

真宗十派法主親下

(氏名省略)

本願寺派宗務総長

神田寛雄

理事長

元理事長

石田充之

大谷派

嶺藤亮

藤原幸章

元理事長

赤松俊秀

高田派

服部恭寿

理事

元理事長

藤島達朗

仏光寺派

渚憲雄

藤原幸章・柏原祐泉・細川行信・北西弘(大谷派)

興正派

高橋香苗

村上速水・山崎慶輝・信楽峻磨・千葉乘隆(本願寺派)

木辺派

浅井自香

川瀬和敬・平松令三(高田学会) 寺倉襄(同朋大学)

誠照寺派

波多野暁浄

長安章俊(京女大)

出雲寺派

菅原茂俊

評議員

藤原幸章・柏原祐泉・細川行信・北西弘・幡谷明

三門徒派

阪本祖温

佐々木求己・広瀬 杲(大谷派)

山元派

仏木道範

村上速水・山崎慶輝・信楽峻磨・千葉乘隆・小川貫式

龍谷大学学長

二葉憲香

武内紹晃・浅野教信(本願寺派)

大谷大学学長

松原祐善

川瀬和敬・平松令三・堤 玄立・小妻道生(高田派)

元理事長

小島勲成

寺倉 襄・池田勇諦(同朋大)

同朋大学学長

結城令聞

長安章俊・靈山勝海(京女大)

京都女子大学学長

大江淳誠

雲藤義道(武蔵野女大) 藤沢量正(本派伝道院)

元理事長

名畑心順

清 亮(真宗教学研究所) 信国 淳(大谷専修学院)

元理事

大原性実

佐々木乾三(仏光寺派) 越智宣祐・園 脩(興正派)

元理事

神子上恵龍

二村龍華(木辺派) 波多野国豊(誠照寺派)

元理事長

佐藤哲英

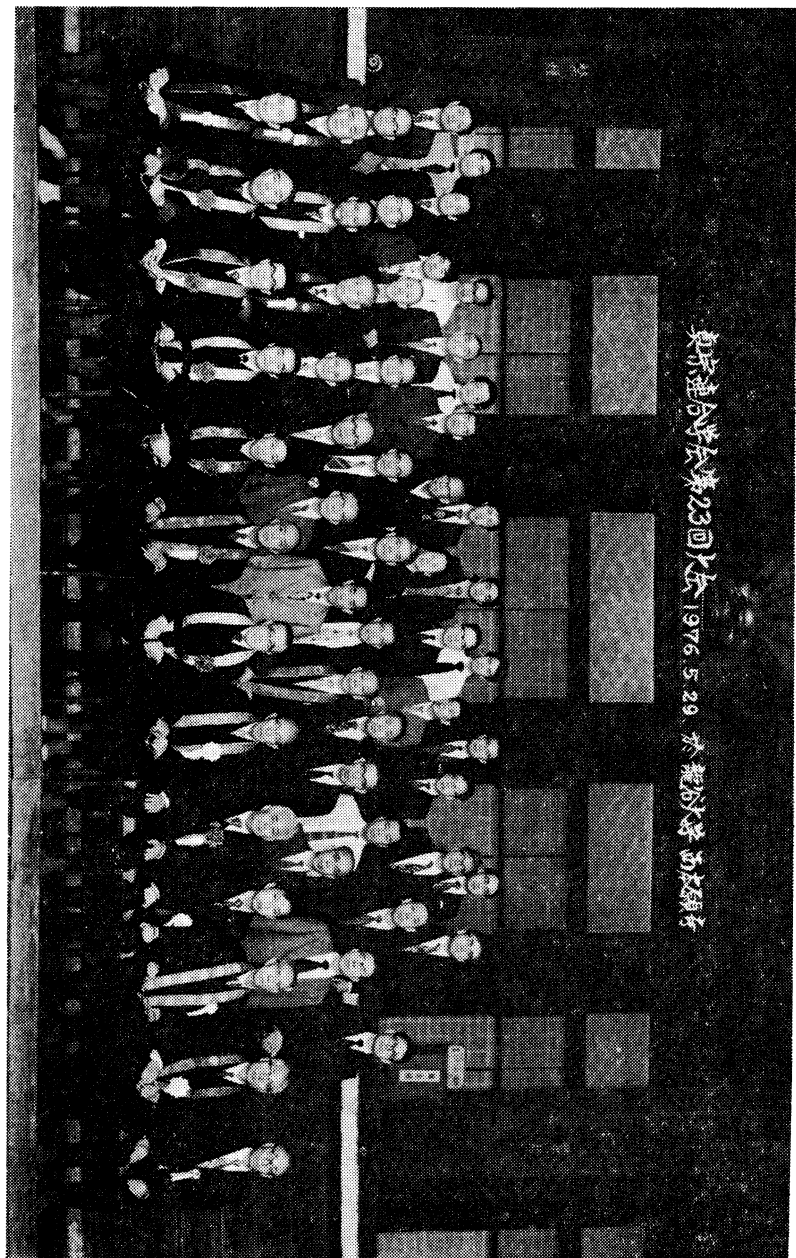
藤季 空(出雲路派) 仏木道範(山元派)

元理事

稲葉秀賢

林 精専(三門徒派)

宮崎円遵



東京連合学会第23回大会 1976.5.29 赤穂市 高木顕子